

とうさん」を「だ・い・す・き・だ」と一般的抽象的に表現したもので、それは具体的な事例を根拠としたものでなければならぬ。この作文ではその事例が④・⑤・⑦として表現されている。従って、文表現の関係位置としては、④↓⑤↓⑦と連続しなければならない。⑥は具体的事例に基づく一般的抽象的な結論であるから、「帰納」要因によって⑦に関係づけられなければならない。だから、④↓⑤↓⑦↓⑥とするのが正しい構造となる。

「文の位置関係」に不適切な箇所があるものの、「要因の項目」の使用については、表現主体の論理性が現れ、五歳児の作文としては、会話部分の「例証」を含めて優れた表現である。

以上、問題点のある三例文を取りあげて、(pSa)の抵抗度の実態を具体的に述べた。事例を挙げればまだ尽きないが、紙数をはるかに超えているので割愛したい。図式の短評により、その足らざるを補っただけならば幸いである。

#### IV おわりに

以上で幼児(五歳児)の言語表現について、「文章(作文)段階における(pSa)」の考察を終る。

前にも述べたように、作文中に表れた「文と文との関係」(構造化に用いられた「構成要因」)の決定について、対象が幼児(五歳児)の作文であるだけに、極めて困難を伴った。そのため独断による過誤を招いたことも皆無ではないと考える。それがまた、検証の結果に多少の影響を与えかねなかったであろうことを危惧するものである。

紀要第十二号において、「文段階における(pSa)」を取りあげたが、

その中心は、一文中の「文節と文節との関係」、すなわち、文節相互の「掛り受け」の表現の問題であった。その結論の一つとして、五歳児の文構造として、(pSa)の機能が最も望ましい形で表現されているのは「6・7文節文」であることを実証した。

本稿における「文章(作文)段階の(pSa)」の考察の結果として「七文構造」をこの時期の幼児の文章構造のモデルとすることの結論を概ねながら出し得たことは、文段階と文章段階との(pSa)の通用性をも示唆するものではないかと考える。

次号では、幼児の言語表現のうち、「主題と使用語彙との関係」について考察したい。

(一般教育・人文)

おともだちのところへ 行って います。③おとうさんは いつも  
ねるのが おそいです。④そして よるに てれびを みて います。  
⑤おとうさんは いぬのさんぽに いきます。⑥おとうさんは い  
つも おきるのが おそいです。⑦おとうさんは ときどき あめが  
ふる ときは かいしゃへ バスにのって いきます。(「構造化の図  
式」3、「第2表-4」3参照)

①を (Sa) としたとき、(Rf) して得られる (ref / sSa) は⑦である  
から、①↓⑦と続けて「補足」とするのがよからう。図では、①↓③  
を「累加」としたが、そうであれば②の次に④を置き、この関係を「同  
列」とし、この二文が③へ「順接」として掛るのが妥当である。要す  
るに、この作文には①↓⑦、②↓④の二箇所に「文の位置関係の不適  
切なもの」がある。この文構造を抜本的に構成換えすると、①↓⑦↓  
(また) ②↓④↓(それで) ③↓(だから) ⑥↓⑤とならう。しかし  
これでも①↓③↓⑥↓⑤と「累加」が連続し、羅列的表现は解消しな  
い。

#### (作文例) 「八文構造」

7 ①おとうさんは ときどき スケートに つれてつてくれます。  
②おとうさんは いつも かいしゃに 行って います。③かいしゃ  
に 行って おもちゃを かって くれます。④おとうさんは たま  
には チョコレートを かって きて くれます。⑤おとうさんは  
にちようびに グランドで サッカーで あそんで くれます。⑥き  
のう かいものに いきました。⑦おとうさんは にちようび おき  
るときが おそいです。⑧おとうさんは ときどき どうぶつえんに  
つれてつて くれます。(「構造化の図式」7、「第2表-5」7参

照)

①・②の行動主体はともに「おとうさん」であるが、①は「おとう  
さん」自体の行動であり、②は表現主体であるこの作文を綴った幼児  
とつながりのある行動主体「おとうさん」の行動である。すなわち、  
①・②には視点の相違がある。①↓②を「転換」としたのはそこに理  
由がある。

①の視点に立つ文は③・④・⑤・⑧であるが、③・④はこの場合②  
の「補足」と考えるのが適当である。②の視点では⑦がこれに属する。  
⑥は行動主体が不明確なので、他の文との関係づけができない。が、  
「きのう かいものに つれて 行って くれました。」のならば、②  
に「累加」としてつながることとなる。

「転換」に対して「回帰」に当たる文が無いので作文の主流が明確に  
うち出されず、全体的な統合に欠け、ことからの羅列に終わっている。

#### (作文例) 「九文構造」

17 ①わたしの おとうさんは いつも ねぼうばかりです。②「ご  
はんですよ。」と いても 「かわりに てを あらって きて。」と  
いいます。③「おとうさん ごはん たべないの。」と いても  
きません。④かいしゃから かって くる と すぐ あそんで ぐ  
れます。⑤ピアノをひいて いると ビデオで うつして くれま  
す。⑥わたしは おとうさんが だいすきです。⑦おとうさんが お  
みやげを かって きて くれます。⑧おとうさんは かわいいのを  
かって きて くれました。⑨わたしは きにいりました。(「構  
造化の図式」17、「第2表-6」17参照)  
⑥「わたしは おとうさんが だいすきです。」は、表現主体が「お

「多文構造」は一般的に言えば構造が複雑であり、「構成要因」の使用項目も多いはずであるが、この「多文構造」に属する作文では、「累加」の使用が多く、羅列的に文を重ねる傾向が強い。また、項目の使用も「平均的構造」より低い。

また、「要因項目の不明確なもの」、「文の位置関係の不適切なもの」も、平均値で見ると「平均的構造」より高く、(sSa・pSa)ともに「平均的構造」に比べ、その機能の劣ることを実証することができたと言えよう。

最後に、II・二・(三)・(2)において述べた「文段階における(pSa)」について、「6・7文節文は文構成上の問題点はほとんどなく、正確に表現されている」ことが、「文章(作文)段階における(pSa)」ではどうであるかについて述べたい。

文章(作文)段階ともなれば、(pSa)は二重に処理されなければならぬ。それは文段階と文章段階とである。五歳児にとっては相当の抵抗であり、問題点が多少出るのはやむを得ないところである。

「第3表」から、「文段階における6・7文節文」に当るものを選ぶとすれば「何文構造」を選ばよいかであろうか。

III・二・(二)・(2)において、「第1表 作文を構成する文数別の頻度のグラフの示す数値により、「寡文構造」(四文構造)、「平均的構造」(五〜八文構造)、「多文構造」(九〜十一文構造)と三構造に大別し、それぞれの文構造ごとに「構成要因」の使用項目の実態と他の構造との比較について考察した。

その作業の経過の中で、「構成要因」の実態から見ると、「文数別の頻度」による「三構造の区分」と一致しない点のあることが明か

なった。それは、「五文構造」は「寡文構造」に近く、「八文構造」は「多文構造」に近いことである。(「第3表」参照)

このことに加え、「構成要因」の使用項目の数と頻度および「要因項目の不明確なもの」、「文の位置関係の不適切なもの」および作文の頻度を総合的に判断して、「平均的構造」のうち「七文構造」を(pSa)から見て、当該幼稚園の五歳児としてのモデルとすることが妥当であると考える。続いては「六文構造」と言えるであろう。

「七文構造」は、「第3表」の集計結果からも、「(So↓Sa↓Sa)の視点の細分化」、「構成要因」の使用項目の状況に見られる視点の発展的論理的展開、従って、構造化が概ね複雑多様で(pSa)の効果を五歳児なりに挙げているといえる。「位置の不適切」な点は今後の指導の課題となろう。

文表現の構造化の点から見た五歳児の指標としては、「文段階」では「7・8文節文」、「文章(作文)段階」では「7文構造」といえよう。

### 三 「文章(作文)段階における(pSa)」の抵抗度の実例

「第3表」によれば、「文章(作文)段階における(pSa)」の作業において抵抗となる構造化の隘路は、(1)「文の位置関係の不適切」であり、(2)「文と文との関係(掛り受け)の不明なもの」であり、(3)「前提」  
↑↓「後件」・「例証」↑↓「帰納」・「転換」↓「回帰」などの「構成要因」相互の正しい関係的処理」がその主なものである。

これらの構造化の隘路と考えられるものを実作の中から指摘し、小稿を終結したい。

(作文例) 「七文構造」

3①おとうさんは いつも かいしゃに 行って います。 ②よるに

「平均的構造」に属する作文であった。しかし、「文の位置関係の不適切なもの」の数は、「第3表」によれば十六例となっている。「寡文構造」には該当例はないが、このことはアの項でも触れたように、当該構造の構成の簡単なことによるものである。

次に「多文構造」と「平均的構造」との比較では、イで行った算出方法によって両者の比率を求めると、「多文構造」の「文の位置の不適切なもの」の出現率は、「平均的構造」の一・四三倍となる。このことは「多文構造」が作文の正常な構造化において「平均的構造」に劣ることを意味している。

エ その他

以上三点の外、「第3表」の数値により各文構造の他と異なる点を挙げると、次のごとくである。

第一に「順接」・「逆接」の使用について、「平均的構造」が「多文構造」を上回っていることである。紀要第十一号所載の小稿における修飾語に見る意識機能についての考察のうち、二・(二)・(1)の「第7表」に示す数値によると、「文節と文節との関係」のうち、「(5)条件的接続の性格を持つもの」の使用頻度は、「5〜7文節文」が最も高い。このことは、「文と文との関係」における「平均的構造」と「多文構造」との比較に相通するところがあることを確認しておきたい。

第二に「前提」の使用についても、「平均的構造」の「多文構造」に対する優位性を見ることが出来る。合計頻度は両構造ともに少ないが、「平均的構造」は「多文構造」の一・三七倍に当る。特に「前提」の、(pSa)として高度な機能を持つことを重視したい。

オ 三構造の比較考察についてのまとめ

### ① 「寡文構造」について

「寡文構造」(四文構造)は調査対象外とした「三文構造」を含めて五編のみで、五十編中一〇%に過ぎない。構造が簡単なため、「文の位置の不適切なもの」や「要因項目の不明確なもの」はないが、要因項目では、十一項目中七項目のみ該当例があるに過ぎない。

このことは、主題についての(So↓Sa↓pSa)の機能の低調であることを示すものであり、まず、その能力の伸張をはかる指導が必要である。

### ② 「平均的構造」について

「平均的構造」(五文〜八文構造)は五十編中二十六編で、全体の五二%を占めており、当該幼稚園における五歳児の文章表現の平均的な構造と考えられる。

構造化の「構成要因」の使用項目数——これは(Sa)の機能の高低を測る一つの重要な目安となる。——も、「三構造」中最も多く、また、使用頻度も高い。しかし、「文の位置関係の不適切なもの」が十六例を数え、一編平均〇・六二例となっている。また、「要因項目の不明確なもの」も三例ある。

このことは、(So↓Sa↓sSa)の機能は幼児としては望ましい発達をしているが、(pSa)のうち「文の位置関係」についてはある程度の抵抗があることを示している。

### ③ 「多文構造」について

「多文構造」(九文〜十一文構造)——十二文(二編)、十三文(四編)、十四文(一編)、十八文(一編)は考察対象から除外——は五十編中十一編で全体の二二%を占め、除外した八編を加えれば三八%となる。

なっていることは当然の結果と言えよう。

「例証」についてはここでは触れないが、ただ、この項にない「帰納」の頻度が(16)を示し、「例証」↑↓「帰納」の関係が均衡を保って、表現の中で要因として用いられていることのみを付加しておく。

(2) 「寡文構造」・「平均的構造」・「多文構造」の比較考察

III・二・(一)で調査対象とした「四〜十一文構造」については「第1表」でも明らかかなように、「5〜8文構造」を、当該園児の平均的文構造と見ることは妥当のようである。

また、「第3表」の「構成要因」を見ても「5〜8文構造」は、その前後の文構造グループと比較すると、相当際立った相違が見られる。

従って、文構造グループ間の比較考察についても、「5〜8文構造」を中心とし「四〜十一文構造」を三分割し、それぞれの特徴を明らかにするとともに文構造グループ相互の比較考察を行いたい。

「四文構造」を「寡文構造」と、「五〜八文構造」を「平均的構造」と、「九〜十一文構造」を「多文構造」とそれぞれ呼称する。

ア 「構成要因」の使用項目の多寡について

「順接」より「回帰」に至る十一項目のうち、「寡文構造」では七項目、「平均的構造」では「五文構造」を除き九〜十項目、「多文構造」では八項目となっている。

「寡文構造」では作文数が三編と少く、四文で構成されているので複雑な構造を持つことができないのは当然である。

しかし、「多文構造」の場合は、文数が多いのであるから、使用項目が多くなるのが自然である。然るに、なぜ「平均的構造」より少く

なるのであろうか。その理由は次の項に譲る。

イ 「累加」・「同列」の使用頻度について

「累加」について、「平均的構造」と「多文構造」とを比較すると、前者は作文一編あたりの平均使用度が一・三五文で、後者は二・七三文である。また、「平均的構造」の中で「構成要因」の頻度から見ると「多文構造」に類する型を持つ「八文構造」を「多文構造」に移すと、前者が一・〇五文であるのに対し、後者は二・八二文となり、後者の前者に対する比率は二・六九倍となる。

「多文構造」の「構成要因」の合計頻度が多いことは当然の現象であるが、その大部分が「累加」で占められていることが、「第3表」によっても見られる。

また、この結論はアにおいて述べた「多文構造」の構成要因の使用項目が、「平均的構造」よりも少い理由の裏付けとなるものであろう。

「同列」については、II・二・(一)において「累加」・「同列」の意義を設定し、両項目の意義の相違を述べた。すなわち、「同列」が(So↓Sa↓sSa)のパターンによる視点の細分化の機能——知覚あるいは思考の細分化・深化——による文表現であるのに対し、「累加」は、視点が変化し羅列的表現に陥り易いということである。このことからいえば、「同列」は「累加」に比して高度な(pSa)の機能があると言わねばならない。しかし、「同列」については、その使用頻度の割合が、「平均的構造」に多少の優位性が認められただけで、決定的な優劣の結果を得ることはできなかった。

ウ 「文の位置の不適切なもの」について

アの項で述べたように、「構成要因」の使用項目の最も多いのは、

(二) 「各文構造グループ」に共通した特徴とグループ間の比較考察  
(1) 「各文構造グループ」に共通した「文と文との関係」の特徴

「第3表」により、「各文構造グループ」に共通した「文と文との関係」(pSa)の特徴を次のごとく挙げる事ができる。

ア 「構成要因」の項目の合計値の低いもの

合計値の低いものから順次に挙げると、「回帰」(1)・「対比」(2)・

「前提」(6)の三項目が目立って頻度が低く、三項目を合計しても四十編の作文に現われる確率は五分の一を割り、幼児にとってはほとんど例外的な「文と文との関係」と言える。

「回帰」は、前述のごとく、「転換」・「逆接」を受けてそれをはじめの筋に戻す役割を持つものである。幼児にあつては、テーマに即した筋立てにより論理的に表現を進行させて結論に導く意識が極めて乏しく、それが文表現に如実に反映されているものと言えよう。

「対比」は、文段階における(pSa)でいうと、「文節と文節との関係」における「比較の基準を表す」ものや「比較・対照を表す」ものに当るであろう。紀要第十一号(昭六〇・三・三一)に発表した拙稿「幼児の言語表現——その修飾語に見る意識機能についての考察」において、「二 連用修飾語の文節における意識機能の内容(性格)」を取りあげ、その中で「(7)他者に対する認識的な性格を持つもの」のうち、「④1比較の基準を表すもの」・「④2比較・対照を表すもの」の用例が、全五九四例中のおおの一例に過ぎないことを述べた。

これなどは、文章段階における(pSa)と文段階におけるそれとの相関性を示す顕著な例と言えるであろう。

「前提」は、「順接」・「逆接」↑↓「前提」の関係を持つ文表現の

構成要因であることは、先にII・二・(1)で述べた。「第3表」によれば「順接」の頻度は(21)で「逆接」は(22)である。然るに「前提」の頻度は(6)に過ぎない。五歳児の意識機能としては、「前提」↓「後件」の移行はある程度円滑に行われても、逆に「後件」↑「前提」となると抵抗を感ずるのである。

イ 「構成要因」の項目の合計値の高いもの  
合計値の高いものから順次に挙げると、「累加」(67)・「同列」(48)・「補足」(33)・「逆接」(22)・「順接」(21)・「例証」(20)となる。この六項目のうち、上位の三項目の頻度の四十編の作文中に出る確率は一文当たり五分の四となっている。「累加」に至っては一・六七五を示している。

下位の三項目も、確率は二分の一を超え、ここに挙げた全六項目は、五歳児の平均的な能力を備える者にとっては使用に堪え得るものと推定できる。

「累加」は他の項目に比して抜群に使用頻度が高い。紀要第八号(昭五七・七・三一) p. 30のIII・三・(三)に「重複的・羅列的表現」として文段階における幼児の言語表現の特徴を挙げたが、「累加」の高い頻度はこれとの相関によるものと考えることができよう。要するに、前述したごとく、幼児の心理的特徴による視点の無意識な変化が期せずして文段階・文章段階の(pSa)に現れたものと言える。

「同列」は、要因の項目の意義づけの項で「累加」との相違について述べたが、両要因はともに観念の連合による視点の変化から生れた観念であり文表現である点では変りがない。「同列」は上位の意味内容に包括され規制を受けているだけに、その頻度が「累加」よりも低く

第2表-7 十文構造の「文と文との関係」

作文番号	順接	逆接	前提	累加	同列	例証	帰納	補足	対比	転換	回帰	不明	位置
1				6		1	1	1					
18				4		1		1		3			2
25		1		4			2	2					2
29				4	3			1				1	1
合計	0	1	0	18	3	2	3	5	0	3	0	1	5

第2表-8 十一文構造の「文と文との関係」

作文番号	順接	逆接	前提	累加	同列	例証	帰納	補足	対比	転換	回帰	不明	位置
11		1		4		2	1	1				1	2
12	1			1	4	1		1		1		1	1
30	1	1		5				1	1	1			3
31	2	1			3			2		1	1		2
合計	4	3	0	10	7	3	1	5	1	3	1	2	8

第3表 各文構造グループの「文と文との関係」の合計頻度等

項目 文構造	順接	逆接	前提	累加	同列	例証	帰納	補足	対比	転換	回帰	不明	位置	作文数
四文構造	1	1	0	2	1	2	1	1	0	0	0	0	0	3
五文構造	2	5	0	7	1	0	1	6	0	2	0	0	1	6
六文構造	2	1	1	1	10	4	1	3	0	2	0	0	4	5
七文構造	6	6	1	9	7	5	4	6	0	2	0	2	5	8
八文構造	4	4	2	18	10	1	1	6	1	1	0	1	6	7
九文構造	2	1	2	2	9	3	4	1	0	0	0	0	0	3
十文構造	0	1	0	18	3	2	3	5	0	3	0	1	5	4
十一文構造	4	3	0	10	7	3	1	5	1	3	1	2	8	4
合計	21	22	6	67	48	20	16	33	2	13	1	6	29	<sup>40</sup> / <sub>295</sub> 文

調査項目は、前述の「構成要因」の項目（順接・逆接・前提・累加・同列・例証・帰納・補足・対比・転換・回帰）と「要因項目の不明確」・「文の位置の誤り」の十三項目とする。

この調査方針により調査した結果は、前掲の「第2表-1~8」のごとくである。

上掲の「第3表」は、「第2表-1~8」を集約したもので、この表の数値から、「各文構造グループそれぞれが（pSa）についてどんな特徴を持ち、また欠陥があるかを把握することができる。

この表からそれらの特徴や欠陥を読み取ること  
に考察を進めよう。

第2表-3 六文構造の「文と文との関係」

作文番号	順接	逆接	前提	累加	同列	例証	帰納	補足	対比	転換	回帰	不明	位置
6			1	1		1	1	1					
19		1			1	1		1		1			3
33					4	1							
40	1				4								
43	1				1	1		1		1			1
合計	2	1	1	1	10	4	1	3	0	2	0	0	4

第2表-4 七文構造の「文と文との関係」

作文番号	順接	逆接	前提	累加	同列	例証	帰納	補足	対比	転換	回帰	不明	位置
3	1			3	1			1					2
5				1	2	1		1				1	1
21	1	3								2			
27	2				3			1					
32	1			1		1	2					1	
42		2				2	1	1					
47		1		2	1		1	1					1
50	1		1	2		1		1					1
合計	6	6	1	9	7	5	4	6	0	2	0	2	5

第2表-5 八文構造の「文と文との関係」

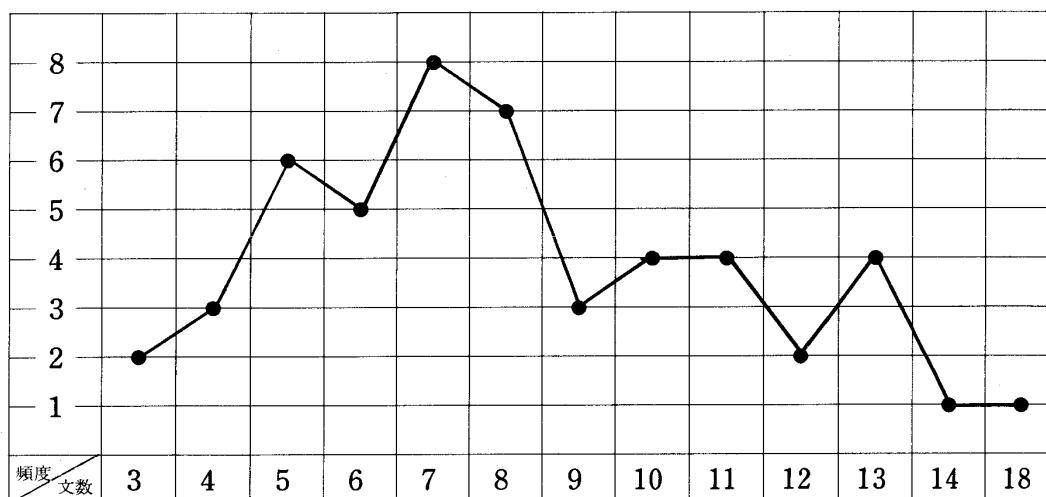
作文番号	順接	逆接	前提	累加	同列	例証	帰納	補足	対比	転換	回帰	不明	位置
2				5				1				1	
4		1	1	4				1					1
7				3	2			1		1			5
13	1			3	2			1					
16		3		2			1	1					
23	3				3	1							
48			1	1	3			1	1				
合計	4	4	2	18	10	1	1	6	1	1	0	1	6

第2表-6 九文構造の「文と文との関係」

作文番号	順接	逆接	前提	累加	同列	例証	帰納	補足	対比	転換	回帰	不明	位置
17	1			1	3	1	1	1					2
28	1				6		1						
39		1	2	1		2	2						
合計	2	1	2	2	9	3	4	1	0	0	0	0	2



第1表 作文を構成する文数別の頻度



「十八文構造」と呼称して横軸におき、縦軸にそれぞれの頻度をおいた。この調査によれば、「七文構造」の頻度を頂点として「八文構造」・「五文構造」と続き、この三構造で全体の四二%を占めている。一回の調査結果によって断定することはできないが、東海第一幼稚園の園児の小学校入学直前の構文能力のうち、作文を構成する文数の点から見れば「五・八文構造」が概ね平均的な水準であると推定できよう。次に、各文数グループ別に、いかなる「構成要因」によって、文と文と

が「掛り受け」の関係にあるかを中心として、前項の実態調査に基づき整理したい。

繁を避けるため調査対象を絞り、「七文構造」を中心として左右にとり、「四・十一文構造」の八構造を調査対象としたい。

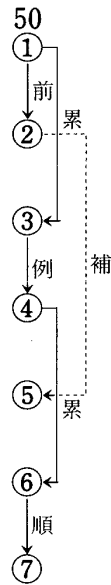
第2表-1 四文構造の「文と文との関係」

作文番号	順接	逆接	前提	累加	同列	例証	帰納	補足	対比	転換	回帰	不明	位置
24	1	1						1					
38				1		1	1						
46				1	1	1							
合計	1	1	0	2	1	2	1	1	0	0	0	0	0

第2表-2 五文構造の「文と文との関係」

作文番号	順接	逆接	前提	累加	同列	例証	帰納	補足	対比	転換	回帰	不明	位置
34	1			1				2					
36	1							1		2			
37				2	1			1					
41		3						1					1
45				3				1					
49		2		1			1						
合計	2	5	0	7	1	0	1	6	0	2	0	0	1

○②・⑤は共に「おとうさんはよくあそんでくれる。」ことを表している。③は「いいおとうさんです。」と言っているのので、③を最後に回して、①→②→④→⑤→③とすると、さらにより。



○(Rf)の機能が文表現によく出ている。それは②・④・⑤・⑦の表現に現れている。⑤を②の次に置き、①→②→⑤→③としたら、いっそうすっきりするであろう。

以上で抽出した五十編の作文の、構造化の構成図式とその検討を終る。図式化の作業を進める過程で困難を感じたことは、「構成要因」の項目を「文と文との関係」に適用する場合、その適用が当を得ているかどうかの判断に苦しんだことがしばしばあったことである。その原因は、五歳児の文章(作文)の構造化に至るまでの総合的な諸機能の未熟さによるものである。

その文表現を適正に行うための隘路については、次の三の項で実作について考察するが、その外の構造化の問題点に触れて参考に供したい。第一は、接続詞の使用度の極めて低調なことである。

昭和五十七年七月発行の紀要第八号P.34に、接続詞の誤用について言及したが、研究の素材とした百七十二文中の接続詞の用例は、連語を含めて十三例に過ぎず、さらにその誤用は三例含まれている。もちろん、この実態は幼児の言語発達から見て、むしろ当然のことかも知れない。しかし、このことにより連接についての意識が形成されず、従って文構成の上にも反映されていないことを証するに足るものである。

第二は、作文の一文一文の構造化の能力が未熟なことである。

このことについては、紀要第十二号で実例に基づき考察したので、これを省略する。(詳しくは、同号P.12以降の「文節と文節との関係」を参照されたい。)要するに、文それ自体の(pSa)がそもそも未熟であるということである。

第三は、幼児の心理的特性である無意識の視点の変化である。

幼児の無意識的な視点の変化は、(So↓Sa↓sSa)という原視点から配賦視点の細分化に至る、対象の特性を深く捕える機能に乏しく、視点が多変に変化して、文表現の段階では、意図的でない単純な「累加」が現れる結果を招くことになるのであろう。このことが「文と文との関係」を断絶することになる。

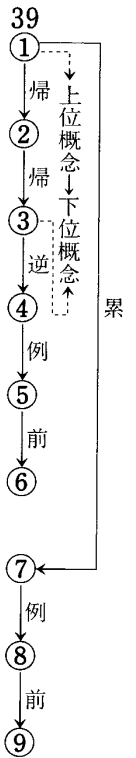
主として、以上の三点が複合的に作用して文表現が行われることが多く、その結果として文章(作文)構造の追跡が困難となるのではないかと思われる。

## 二 文章(作文)段階における構造化の「構成要因」等の、「合計文数別グループ」の特徴

この項では、前項における作業の結果を受け、同数の文によって構成された文章(作文)群——(合計文数別グループ)——の「文と文との関係」が、II・二・(二)・(4)で設定した「構成要因の十一項目」にいかにか該当しているか、また、文の位置の誤りの実態はどうかを調査し、その「文数別グループ」の特徴を明らかにするとともに、グループ間の比較検討を行いたい。

### (一) 「合計文数別グループ」の頻度と調査対象グループの決定

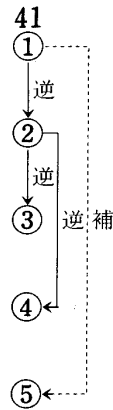
「第1表」は、素材として無作為に抽出した五十編の作文について、それぞれの作文を構成する文数別にグループ化し、「三文構造」→



○構造化が論理的に進行し、すばらしい構成能力が窺える。



○①→②の「順接」の「掛り受け」に続いて、③→⑥と「順接」が連続し、視点の変化がない。



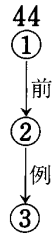
○①「おじいさんはいつもはたけにいてしごとをやります。」ということを、天候の条件によって変ったり、また、それでも変らないことを、②→④の「逆接」によって周到に表現している。ただ、⑤「おじいちゃんは4じぐらいにかえってきます。」の位置は②の前に置く方がよい。



○大変うまく構造化され、テーマに沿った表現がなされている。

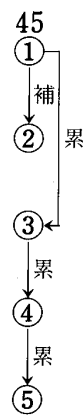


○⑤・⑥の「例証」を④の前に挿入し、②→③の「転換」を「順接」に改め、⑥→①→②とするのがよい。



○①の「前提」である②は、「よい料理をつくりたい。」ことである。

そのメニューを③で「例証」として、一文の中にいくつも挙げている。構造は極めて簡単である。



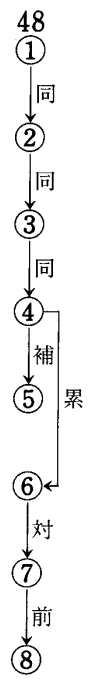
○①・③・④・⑤と「累加」が続き、自分のしたことこの列挙で作文が終っている。



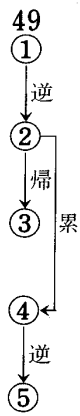
○表現対象に対する観察・知覚と意識の機能が低調である。



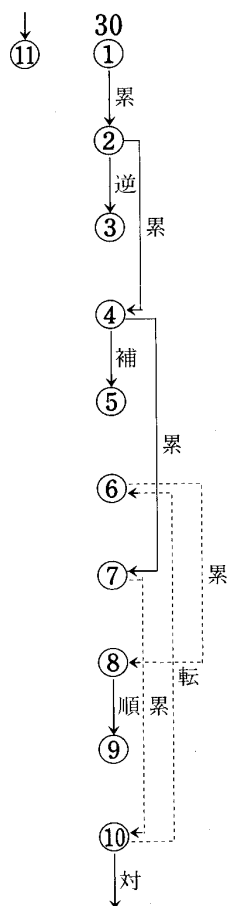
○⑦で「帰納」する具体的な根拠となる文が先行せず、⑥→⑦が唐突で関係を表現していない。



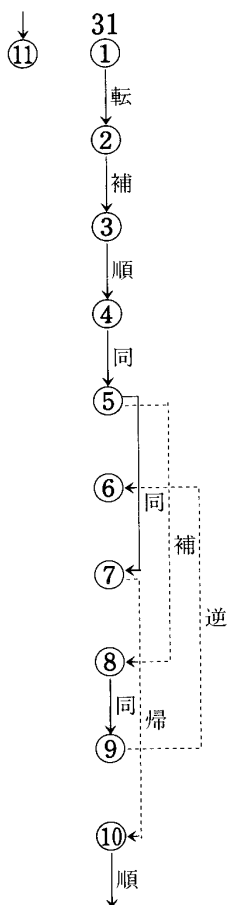
○主題は「ぼくのすきなたべもの」で、①・②・③・④で季節の代表的なものを一つずつ挙げ、それらを⑤で括り「みんなだいすきです。」と念を押す。④→⑥で一年中好きなものとして「からあげ」を挙げ、⑦で「からあげ」をおかあさんが嫌うことを「対比」して述べ、さらに⑧で嫌う理由を「前提」として表現している。論理的に正しく構成されている。⑧→⑨としたら、①→⑥が十分に生かされる。



の運びからの逸脱であろう。⑨から⑩への「帰納」も、①・②・⑥・⑦・⑧の具体的事例の内容が必ずしも適応していない。すなわち、「帰納」を導きだすための視点からの(pSa)に誤りがある。



○①～④の行動主体は「おとうさん」で一貫しているが、それ以後⑥・⑧は「作者」であり、⑦・⑩は「おとうさん」である。従って構造化に混乱を生じている。図式の破線部のごとく結び、①↓と(pSa)がよく通る。



○②以降は、⑧の位置が適切でないのを改める——(⑤)補(⑧)同(⑨)逆(⑥)——のと、でき得れば①を④・⑤の間に挿入して、④順①順⑤のごとくすれば、「文と文との関係」は落ちつく。



○④↓⑤で「転換」して「回帰」がなく、構造が前後に分れる。①～④で「ともちゃん」のかわいいことを述べ、⑤～⑦で「とも

ちゃん」をかわいがる兄を「やさしい」といつている。後者はテーマから外れているが、自分がかわいがるのと同じく「ともちゃん」をかわいがる兄を「やさしい」と感じる心が自然に現れ出たからであろう。

○①の根拠となる「例証」を②～⑥と列挙した簡単な構造である。



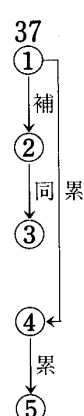
○寡文構造で構成は正確である。



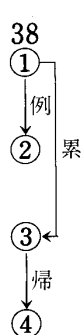
○①「おとうさんはやさしいです。」を、②で「あそんでくれます。」と大づかみに「例証」し、③を③で「さっかーぼーるであそびます。」と具体的に「例証」する。



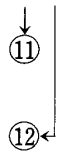
○②の「転換」は唐突で、①・②・③とのつながりが断絶。



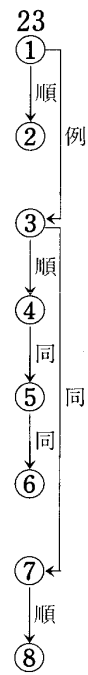
○①の根拠となる「例証」を②～⑥と列挙した簡単な構造である。



○寡文構造で、構成に誤りはない。



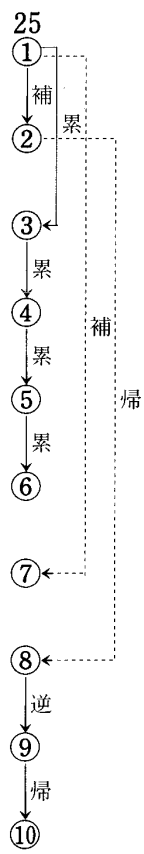
○⑧～⑪の「補足」は同類のもので、⑦→⑫の「補足」は前者と異類のものである。「転換」からの「回帰」がなく作文として二分されている。



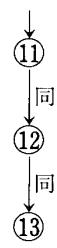
○①で「おとうさんがおしごとに行く」ことを述べ、③・⑦でそのことを具体的に「例証」している。さらに、⑧で③・⑦を受けて、「おとうさんと同じ仕事をしたい。」とっている。(pSa)がよく働いている。



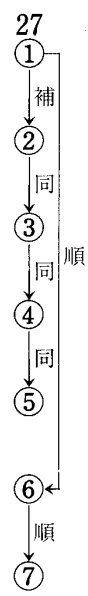
○おとうさんの朝の出がけを表現しているが、(Rf)が細かくなされていない。



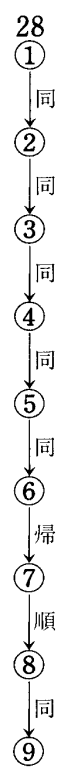
○②の「帰納」は、「仕事をしている」具体例を受けて、「おとうさんはいそがしいです。」とくり、⑨→⑩の「帰納」は、②→⑧→⑨を経て「だいききなおとうさん。」と総括している。異系列の「累加」で、本流から遊離してかえってテーマに基づく秩序ある統合化を損っている。



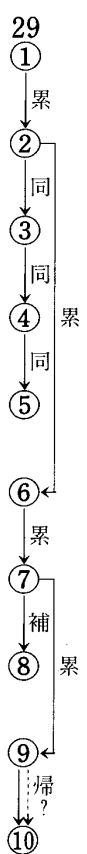
○「十三文構造」で作文としては長文であるが、②の「例証」の列挙で終わっている。「Aは××である。」「しかし、Bは△△である。」というに過ぎない。



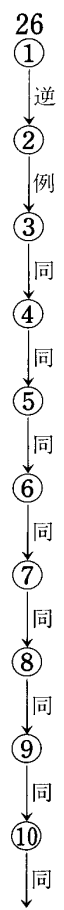
○②～⑤は①の「補足」説明である。骨格は①→⑥→⑦で、「もだちはだれだれだ。」→「だから、もつといっぱいほしい。」→「それで、しょうがっこうになったら、いっぱいつくるぞ。」と、いたって簡明解である。

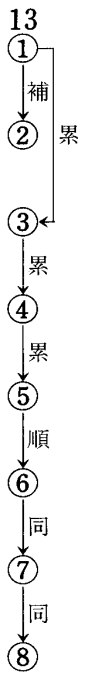


○①～⑥で、おかあさんの毎日の仕事をいろいろ挙げて、⑦で「いそがしいです。」と「帰納」し、⑧で⑦を受けて「おかあさんにかんしゃしています。」とっている。すっきりと筋の通った直線的な構造である。

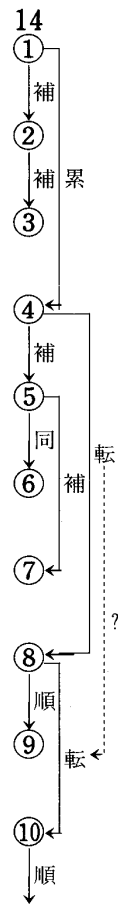


○②の行動主体は「おとうさん」であるが、その動作による連想から、異なる行動主体の同じ動作を③・④・⑤と「同列」に表現している。そのあと、「おとうさん」の動作や性状を合わせて⑥・⑦・⑨と続けている。③・④・⑤は、幼児の連想に起因する正常な筋

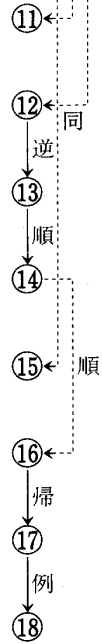
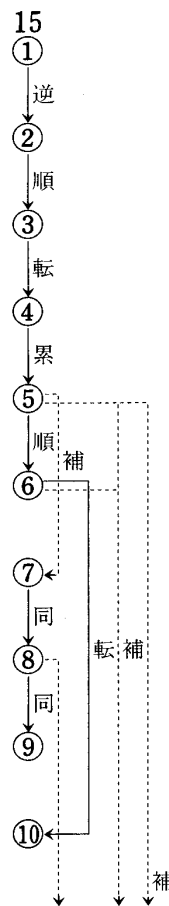




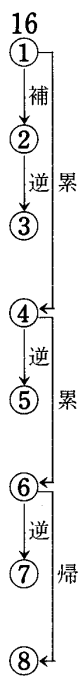
○五歳児の作文としては難点なく構成されている。



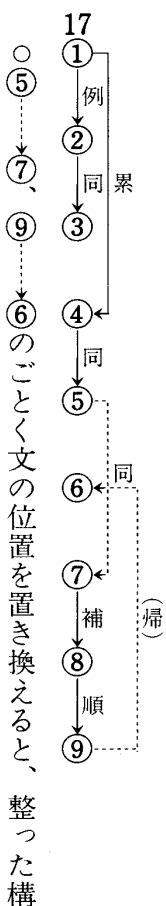
○④→⑧は同一行動主体に関する異質の内容への「転換」であり、  
⑧→⑩は行動主体そのものの「転換」である。特に後者の「転換」は主題から逸脱している。



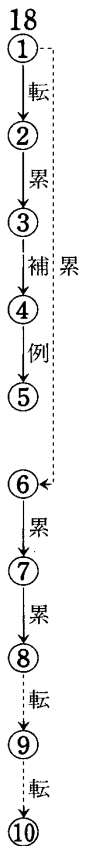
○五歳児としては超多文構造で、(rfs)は豊富であるが、(pSa)の段階でそれが活かされていない。



○構造化が無難にできている。



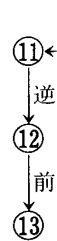
造となる。⑥で作文は終結する。



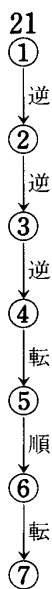
○①→②、⑧→⑨、⑨→⑩は、「転換」を「回帰」で受ける文がなく、統一を甚だしく欠いている。すなわち、(pSa)の操作ができていない。また、「累加」があまりにも羅列的である。



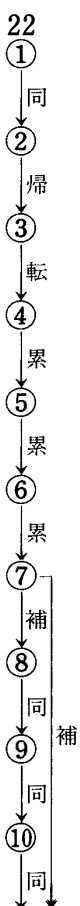
○③→④→①→②→⑤→⑥と文の配列を換えれば構造は整う。(pSa)の能力の不足。



○①→②は、①→③の「転換」と、それを「回帰」させないことにより遊離している。また、「順接」・「逆接」の連鎖で筋が混乱。

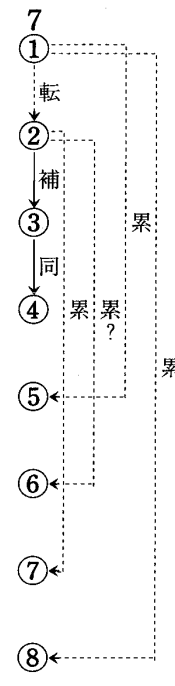


○①→②→③→④の「逆接」の繰り返しの中で考え方が両極に往復し、④を受けて意識の「転換」をはかり、連接の表現形式には現れてはいないが、意識的には①への「回帰」がある。心理の移り変わりをうまく表現している。

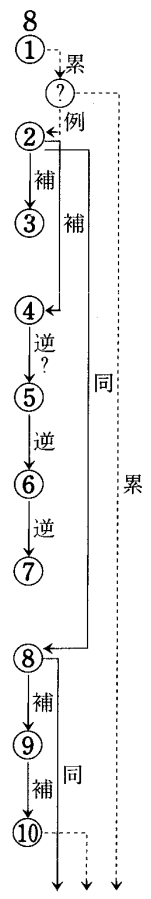




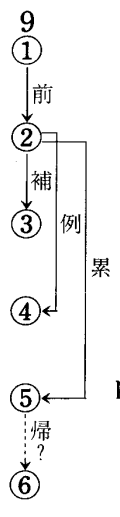
○ 文数は多いが、「例示」とその「同列」のみで、場面の転換や展開に乏しい。



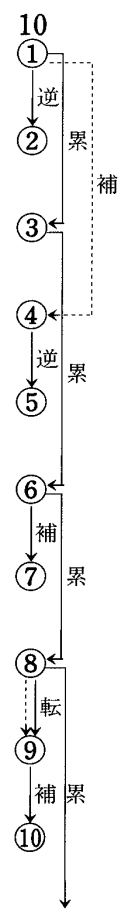
○ ② → ⑥は、⑥の行動主体が不明で構成要因の決定ができない。  
また、文の構成上の位置づけが不正確であるが、これは (rfs) をそのまま文表現に移し、(pSa) が行われていないからである。



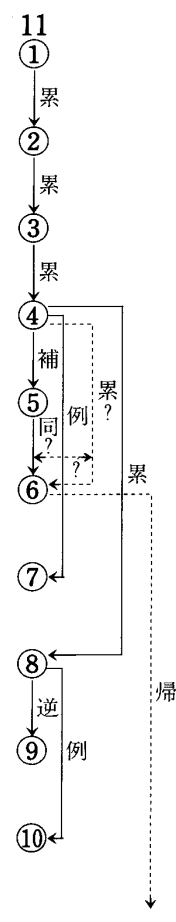
○ ①と②との間に、⑪とともに「累加」に当たる文を入れたい。①は、「のりくんは、ようちえんがおわったら、すぐきます。」⑪は、「おやつをたべます。」②は「例示」で「きたら、サッカーとゴルフをします。」であるから、②には「ふたりであそびます。」を挿入する。④ → ⑤の「逆接」は④のすべてを受けてはいない。⑬は⑩のみを受ける表現になっているが、これでは「帰納」として疑問。多文構造で、(pSa) の処理に抵抗が強い。



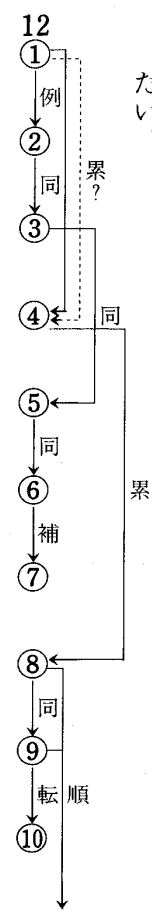
○ 「帰納」とするには、前文中に具体例が乏しい。根拠がなくて唐突な表現である。



○ 多文構造にしては「累加」が多い。⑨の「転換」が「回帰」せず、遊離している。



○ ⑤の文表現が不明瞭なため、⑤ → ⑥が同列なのか、④ → ⑥が「累加」なのか判然としない。従ってまた、⑥ → ⑪も読解しがたい。



○ ⑧ → ⑨は、「転換」で⑩の「回帰」はないが、⑩の観念連合として、⑪の「受け」が生まれたと見たい。

### III 「文章(作文)段階における(pSa)」についての検証

#### 一 作文ごとの構造化の図式とその検討

前章の二・(二)・(4)において設定した「構造化の構成要因」に基づき、無作意に抽出した五十編の作文について、各作文ごとに構造化の実態を図式化し、検討を加えることとする。

(備考)

(1) 各作文の冒頭に付した算用数字は作文番号である。

(2) 「文と文との関係」を示す構成要因の項目の名称は、「①順接

(順)、②逆接(逆)、③前提(前)、④累加(累)、⑤同列(同)、⑥

例証(例)、⑦帰納(帰)、⑧補足(補)、⑨対比(対)、⑩転換(転)、

⑪回帰(回)」の括弧内の略記号で示す。

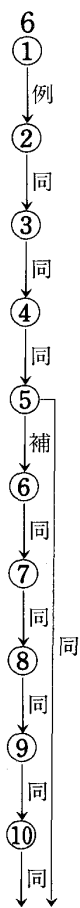
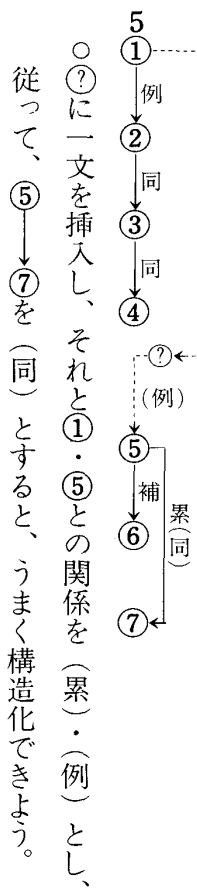
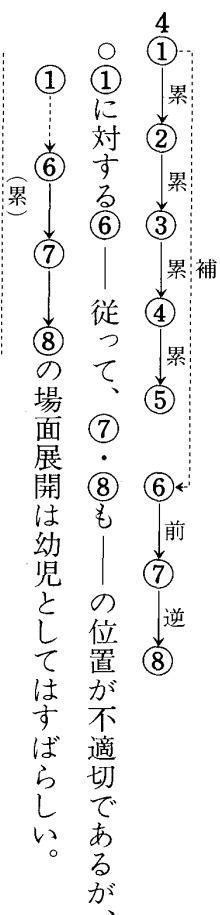
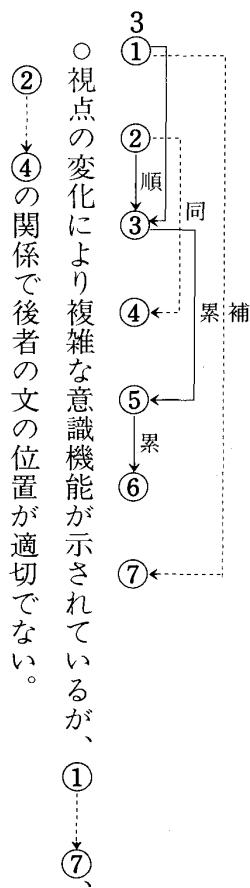
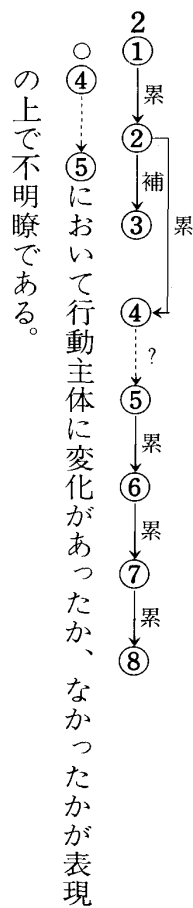
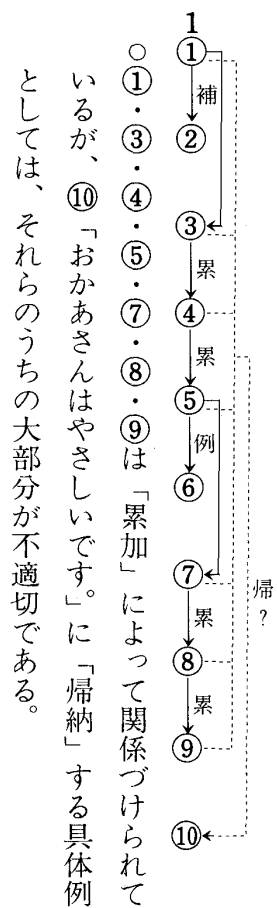
(3) 「文と文との関係」を示す結線のうち、①↓②は適切な表現上の関係位置にあることを示し、①⇓②はその不適切なことを、

①⇑②は正しい構造化の関係がどの前文からも関係づけられない場合を示す。

(4) ②は一文の挿入を必要とすることを示す。

(5) 文は文字による表記をせず、①⇓②⇓③のごとく、文の表現順序に従って記号で示した。

前章の二・(三)・(3)の「構成要因に対する抵抗度」の考察については例文を挙げて具体的に(pSa)の問題点を詳細に検討する予定であるが、この項では、「各文構造」における「構造化の構成要因」の頻度を統計的に処理し、その傾向を把握するための資料を得るのが目的であり、また、繁を避ける意味も含めて、記号をもって「文と文との関係」を図示することを諒とされたい。





段階における (pSa) についての考察に基本的に必要な「文章構造の構成要因」を設定したい。

紀要第十二号においては、「文段階における (pSa)」を研究主題としたが、それは文法的な処理によって (pSa) の考察を進めたものであった。従って、この稿においても研究方針に一貫性を持たせるため文法的観点に立って考察したい。

そのため、塚原説を中心とすることとし、それに今井説の考え方を加え、さらに私見により構成要因の項目を補充して、次の十一項目とした。

- ① 順接 ② 逆接 ③ 前提 ④ 累加 ⑤ 同列 ⑥ 例証 ⑦ 帰納 ⑧ 補足
- ⑨ 対比 ⑩ 転換 ⑪ 回帰

(三) 考察の手順

(1) 五十編の作文を対象とし、十一項目の構成要因を適用して各作文ごとの構造化の実態を把握する。前述のごとく、「文表現の段階」は文段階・段落段階・文章段階の三段階より組織されるのが普通である。しかし、五歳児の文章表現の能力としては当然のことながら、一編の作文が数文より成立しているのが平均的な状況である。従って、「段落と段落との関係」を考察の対象とするのは不可能なことである。この稿では「文と文との関係」に限って考察を進めるとしたい。

(2) 作文を構成する文数により、同数の作文をグループ化し、——例えば、七文で構成される作文を「七文構造」と呼ぶ。——各文構造グループについて、構成要因の十一項目の合計頻度を算出し、(pSa) の機能と各文構造間の平均的な相関関係の有無を検証したい。

その理由は、紀要第十二号で研究主題とした「文段階における (pSa)

の考察を中心として」においても、寡文節文・平均的文節文・多文節文の構造化の結果に大きな特徴が発見されたからである。その考察の中で、特に重要な箇所を挙げると次の通りである。

同号 P. 23 に『6・7文節文』は、文・構成上の問題点がほとんどなく、正確に表現されている。またさらに、多文節文になればなるほど、意識機能が複雑深化されていると見なすことは当然のことであるから、(pSa) の働きを含めて、「6・7文節文」の一文としての優位性は明らかであろう。しかるに、「8文節文以上の文」になると、文構造の上で諸種の問題を含んだ例文が多く現れる。』と述べたものである。

「文節と文節との関係」において、「4・5文節文」の構造化の能力が五歳児においては平均的な水準であり、「6・7文節文」を越えて「8文節文以上」になると構造が複雑となり、この時期の幼児の能力としては対応できないことを示している。このことが「文と文との関係」においても、どこかに限界点があることが推定される。この仮説を実証しようとするのがこの作業である。

(3) 次に、十一項目の構成要因のそれぞれ——それは「文章(作文)段階における (pSa)」——「文と文との関係」の統合化・構造化をはかるための因子の活動』につながる。——の五歳児における抵抗の度合を見るための作業である。

以上三段階にわたる作業を行うことにより、幼児の文表現における構造化の実態を捉え、また、五歳児として構造化の過程の中でいかなる構成能力に到達し、あるいは到達していないかを明らかにすることにより、将来の具体的な指導のための参考に供したい。

今井氏は①順について、著述の中で「順の下に、順接・前提・補足をおくなど。」(文章表現法大要 P. 69)と述べている。順接はもちろん、後件↓前提・陳述↓補足と、前提や補足は後件や陳述にそれぞれ観念的に連合することが当然考えられるので、視点の展開・移行も円滑に行われることになろう。

その意味では、塚原氏の累加・同列・例証も順に包括されてよいものではなからうか。(累加を順に入れることには疑問もあるが、観念の連合が見えないところにあることは否定できない。)

## ②逆

逆については、前掲のごとく「AからBに移るのに視点が今までと逆になるとき。」であるから、塚原説の逆接はもちろん、対比もこの中に入れてはどうであろうか。

## ③飛

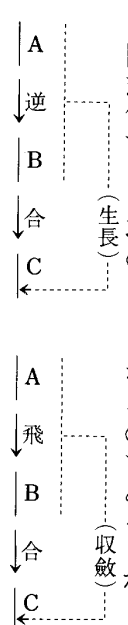
飛については、同じく「文章表現法大要」P. 69に、「飛躍というのは転換といってもよい。」と述べているので、塚原説の転換と見て差支えないであろう。

## ④合

合の意義づけとして、『A視点(場面)の滋養を受けてB視点(場面)が生長したり、あるいは収斂されたりするとき。(これは逆や飛をどこかで受けとめなくてはならぬので、それを受けとめて文章本来のペースにもどす場所を考えてのことである。』と述べている。(傍点部分は、前述の(二)の項の該当部分をわかりやすく表現するために補足して表現したことを示す。)

この記述によれば、「逆↓合・飛↓合||生長・収斂」となる。これ

を図式化すると次のごとくなるのであろうか。



## (3) 構成要因の項目の補充について

塚原説の⑥例証は、前述のように抽象的な内容を表す文節や文を受けて、具体的な例を挙げてこれを実証する場合を指す。しかし、これとは逆に具体的な事例を挙げて、これを抽象化一般化する「文節と文節との関係」や「文と文との関係」——今井説の用語をもってすれば、「A視点(場面)からB視点(場面)へのわたり。」といってもよいが、——を持つ構成の要因に関する事例はいくらかもある。この要因の呼称を⑥例証と対照させて帰納と呼んではいかがであろうか。これは、幼児の言語表現の中にも散見する。

同じく、塚原説の⑨転換に対して、今井説の、飛をどこかで文章本来のペースにもどすための場所を考えての合(収斂)にあたる項目がない。従って、これを補って⑨転換と対照的に回帰を補ってはいかがであろうか。もちろん、回帰といっても単純に転換・飛躍したものが元に復帰するのではなく、今井説の述べるように、転換・飛躍したものの滋養を受けて、新しい意味を付加しての回帰でなければならぬ。

## (4) 本稿における構成要因の設定

(1) (3)において、塚原説および今井説の構成要因の概要を述べるとともに、必要に応じて私見をも付加し、さらに、両説の統合と構成要因の補充を試みた。

以上述べたことを総合して、本稿の研究主題である「文章(作文)

れた複数の (ref) の並列的に文表現されたときの関係を指すとも言えるであろう。

#### ⑥例証・⑦補足＝解説

⑥例証は、抽象的な概念ないしは意味内容を表す文節または文を受けて、具体的な例を挙げてこれを実証するとき、後の文節・文の、前者との関係についていう。⑦補足は、言うまでもなく前者において十分に表現しきれない概念や意味内容を補う場合の関係についていう。このように意義設定したい。

「ぼくのおとうさんはいいおとうさんです。↓いっしょにあそんでくれます。」(例証)

「おとうとはかわいいです。↓やんちゃをするときもあります。」

(補足) 〈補説〉この例文の「文と文との関係」は、逆接とすることも考えられる。しかし、この場合、「やんちゃをする」ことは、かわいいことを一部分否定する実例を挙げたのであり、その意味するところは、だいたいはかわいいということ、後文を補足することにより表現していると考えたい。「わたしは走るのが速い。↓しかし、走るの嫌いです。」というような「逆接の関係」とは異なる。

#### ⑧対比

二つのものを比較してその差違を述べるのが、⑧対比であることは言うまでもない。従って、「文節と文節との関係」においても、「文と文との関係」においても、行動や性質・状態(情態)に関わる二つの主体(二つ以上のときもあり得る)が存在しなければならぬ。

#### ⑨転換

⑨転換は、「掛り受け」の関係が、筋を追って展開したり、疎から

精へと深まったり、脈絡が順当につながって表現されていくのとは反対に、前後の筋が急に断たれて異なる場面が突然展開するもので今井氏の「構成要因」でいえば、「飛」の項目に当るのであろう。

#### (2) 今井氏の「構成要因」についての私見

(二)の項の冒頭で、構成要因の設定に関して今井氏の著述を引用し、塚原氏は文法的な観点から構成要因を設定し、今井氏は視点的な観点到立って要因の設定を試みていることを述べた。

しかし、視点と文法との関係を考えるとき、両者はそれ程異質で無関係なものとは考えられない。すなわち、

視点・原視点↓配賦視点↓配賦視点の細分化 (So↓Sa↓sSa) ↓遠近法 (pSa) (視点の位置の決め方、〈rfs〉の距離の取り方) ↓文章化の過程の中で、文章化されたものの基礎となるものは視点であり、また (rfs) を遠近法にかける (pSa) | ことは、(rfs)〈ref(a)・(b)・(c)〉を統一ある全体として一行構造に組み入れるための処理であり、その結果が文節を形成し、文となり、段落となり文章となる。文章化の過程の中で、遠近法 (pSa) は (rfs) を文表現に導く操作であり、その中に文法的処理はある。

従って、視点をもって構成要因を捉えることは、文章化に至る精神的機能の基礎的な段階をもってするという意義はあるにせよ、文法的な観点から要因を捉えることとそれ程本質的な隔たりがあるものとは考えられない。

このような意味から、塚原、今井の両説を同じ範疇におく立場から、今井説の構成要因を塚原説のそれと対照しながら見ていきたい。

#### ①順

飛——AからBに移るのに視点に飛躍が必要であるとき。

合——AからBに移るのに、視点が滋養を受けて生長したり、あるいは収斂されたりするとき。（これは逆や飛をどこかで受けとめなければならぬので、それを受けとめて文章本来のペースにもどす場所を考えてのことである。）

この四項目をさらに細分して、『例えば「順」について、「順接・前提・補足」をおくなど。』と述べている。

以上で、塚原・今井両氏の文表現に関する構造化の構成要因についての概略を紹介したが、さらに、これらの考え方に私見を加え、本稿の考察の対象とする五歳児の作文の（pSa）の実態を分析するための構成要因の設定に入りたい。

### (1) 塚原説の構成要因の九項目についての私見

前述したごとく、この構成要因の九項目は文章・段落・文の三段階に共通して、上部と下部（段落と段落、文と文、文節と文節）との関係すなわち「掛け受け」を検証するためにも基準となる文構造の構成要因である。従って、それらの要因の意義をでき得る限り正確に確認するとともに私見をも付け加えたい。

#### ①順接

文段階では、「速く歩いたので・疲れた。」のごとく「理由・原因↓順・当な結果」と掛り、格助詞「ので・から」の外、接続助詞「て・と・ば」などが、前提条件を表す自立語につく。

「文と文との関係」では「ぼくは速く歩いた。↓それで少し疲れた。」のごとく、後件を表す文の文頭に順接を表す接続詞「それで・だから」などがつく。

#### ②逆接

前提となる文節や文が後件となる文節や文と「掛け受け」の関係が生ずるとき、逆の結果を招く場合を指す。「文節と文節との関係」では逆接の接続助詞、「文と文との関係」では逆接の接続詞が、後件を表す文節あるいは文の前にくるのが一般である。

#### ③前提

「文節と文節との関係」、「文と文との関係」を問わず、「前提↓後件」の接続によって因果関係は表現される。「前提」とは当然前におく文節（句・節）ないしは文を指して言うのが普通である。すなわち、順接・逆接の場合の「前提」にあたる。③前提は従って、通常の「前提↓後件」が倒置された型式と見なければならぬ。実例を挙げると、

「わたしが転んだのは注意しなかったからです。」（文節と文節）

「わたしは教科書を忘れてしまった。それは家を出る前に確めなかったからです。」（文と文）

#### ④累加・⑤同列

④累加・⑤同列は、ともに文節・文などが上下に連続する場合の関係をさす。しかし両者の相違するところは、⑤同列が、ある概念や意味内容を持つ文節ないしは文に包括され得る概念や意味内容を持つ複数の文節や文が並列するとき、それら相互の関係を指す呼称であるのに対して、包括される対象を持たない複数の文節ないしは文が並列する場合のそれぞれの関係に対する呼称を④累加として意義設定したい。前者は同じ視点による（ref）の細分化の結果を（pSa）を通して文表現されたものといふことができ、後者は視点が大きく換ったたびに得ら

くない。

題目は、「おとうさん」・「おかあさん」・「おじいさん」・「おばあさん」・「おにいさん」・「おねえさん」・「おとうと」・「いもうと」・「おともだち」・「いちねんせいになつたら」・「おおきくなつたら」・「すきなもの」など、家族のだれかを表現対象とし、また自分の日常生活に密着した題目の中から、園児に自由に選択させている。

従つて、研究対象の資料としては妥当なものであると考える。

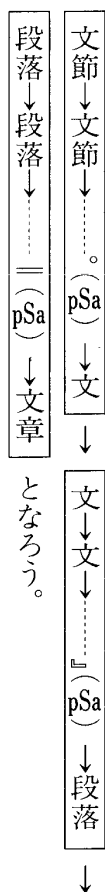
素材の選択については、作文総数が百二十二編に及ぶので、その中から五十編を無作為に抽出した。

## 二 考察の方法

(一) 「文章(作文)段階における(pSa)」の意義の設定

Iにおいて述べたように、言語表現——特に文字言語による表現——においては、(So↓Sa↓sSa)の意識の細分化に至る精神的な機能の結果を表現する場合、それらの(sSa||rfs)を(pSa)の操作を通して、意識の構造化・統一化をはからなければならない。

構造化・統一化された文表現の組織の段階は、文段階・段落段階・文章段階と漸層的に構造化され、論理的に統一ある全体として表現の完結を見ることは、一般的に是認されていることは言うまでもない。これを図式化すれば、



「文段階における(pSa)」の五歳児の実態については、「文法的処理」の観点からこれを紀要第十二号において考察した。

文段階の構造化を言うとき、それは「文節と文節との関係」が(pSa)によつて統合されていることを指す。段落段階においては、「文と文との関係」が段落として統合されて始めて、段落としての表現機能を發揮することができる。文章段階においても、また、然りである。

要するに、文章の完結に至る三段階——文段階・段落段階・文章段階——の成立要因は、これを文法的な観点から見ると、概ね共通性をもっている。それを概括的にいうと、「掛り・受け」に外ならない。それでは、文章(作文)段階における構成要因の項目をどのように設定すればよからうか。

(二) 「文章(作文)段階における構成要因」の項目の設定

塚原哲雄氏は、文・段落・文章の三段階に共通した構造化の構成要因を挙げて、次のように述べている。すなわち、

順接・逆接・前提・累加・同列・解説(例証・補足)・対比・転換の九項目である。

また、今井文男氏はその著「文章表現法大要」P 68・69で、塚原氏の説を「……穏当だとされる。」と、一般的な評価・是認を肯定して、ある意味での賛意を表している。しかし今井氏は、表現の三段階に共通の接続・連接の立場からする「構造化の構成要因」にかえて、「文法的には無理かもしれないが」という但書を付して——Aの場面からBの場面へ変るとき「わたり」に注目して、次のような要因を挙げてゐる。

順——AからBに移るとき視点に変化のないとき。(変化がない

とは、視点の流れがなめらかにそのままつながり得ることをいう。)

逆——AからBに移るのに視点がそのままと逆になるとき。

# 幼児の言語表現——その文章(作文)段階における

## (pSa) についての考察

佐合久一郎

### I はじめに

昭和六十一年三月三十一日発行の東海女子短期大学紀要第十三号に、「幼児の言語表現——その文段階における (pSa) の考察を中心として」という拙稿を掲載した。この研究の目的は、五歳児の園児の文章表現に関して、文段階における構造化の実態を分析考察し、当該園児の平均的な文構成の能力についての発達度の現況を把握するとともに、将来的な文章表現の指導を行うに当って具体的な指針を得るに必要な基礎的な資料とするためのものであった。

「文段階における (pSa) の考察」といっても、その考察すべき視点は複数にわたるが、幼児の段階にあつては、それらの諸視点にわたつて考察を進めることは、一般的に不可能に近いことであつたので、「文法的処理」に限って (pSa) の実態を検証した。

「文段階における (pSa)」を見るには当然のこととして、その文節文における「文節と文節との関係」が、文法的に見て適法に関係づけられていないか、すなわち、一文を構成するある文節が他の文節と相互に意識的なつながりを持ち、統一ある全体として構造化されているか否かが考察されなければならない。

前号においては、それを「修飾——被修飾の関係における修飾語の位置」・「対等(並列)の関係にある文節(句・節)の表現法の問題」

・「掛り受け(呼応)の表現法の問題」の三点に考察の重点をおいて (pSa) の実態を見た。

一体、文章構成の要素の五段階——文章・段落・文・文節・語——のうち、構造化を問題とする場合、それは文章段階であり、段落段階であり、文段階である。そして、この三段階のそれぞれの構造を言うとき、その構成の要因に概ね共通性を有していることは大方の認めるところである。

従つて、小稿においても、「文章(作文)段階における (pSa) の考察」を進める基本的手法として、前号の方法を受け、構造の三段階の共通性を認める諸説を借り、さらに私見を加えて、文章構成の要因を決定し、それに基づいて考察を進めたい。

「文章(作文)段階における (pSa)」の考察に入るに当り付言したい。「文段階における (pSa)」すら、これを考察の対象とすることは、幼児の精神発達の程度と表現能力の未熟さから考えて多少の疑問を持たないわけではなかつた。いわんや、「文章(作文)段階」においてはより一層の躊躇を感じるものである。しかしながら、この小稿の目的が冒頭に述べたところにあることで、これを諒とされたい。

### II 考察の素材と方法

#### 一 考察の素材

東海女子短期大学付属東海第一幼稚園卒園記念文集の作文を考察の素材とした。文集所載の作文は、五歳児の卒園直前の二月に保育の中で綴られたもので、「保育内容」の指導の中で、一般的な事前の話し合いは行われているが、作成時の直接の指導や保護者による加筆も全